



西日本支部 創立30周年 「記念シンポジウム，第2回講演会，祝賀会」報告

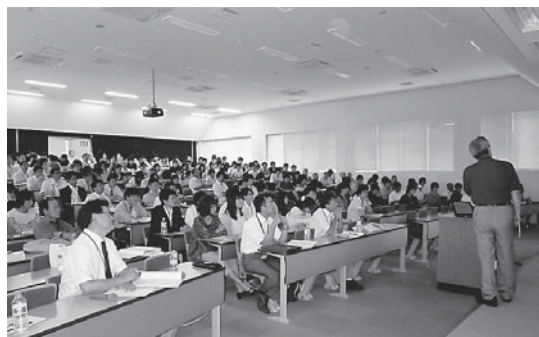
中国・四国地域の9県から構成される西日本支部（支部長：稲垣賢二 岡山大学教授）では創立30周年を記念して、7月7日（土）に「明日を拓く生物学—Biotechnology, Today and Tomorrow—」と題した記念シンポジウムと第2回講演会，祝賀会を岡山にて執り行いました。当日は未明まで大雨と雷雨の大荒れの状態でしたが，朝から天候が一変，強い日差しが照りつける蒸し暑い七夕となりました。午後からの開催となった記念シンポジウムは，岡山大学津島キャンパスの一般教育棟にて原島俊会長を含む243名の出席者を集め，4名の生物学のシニア研究者から，特に若手研究者・学生の研究意欲を大きく高揚させる熱烈なメッセージを賜りました。

永井史郎先生（広島大学名誉教授）は，西日本支部設立当初から10年間支部長を歴任，91～95年には学会会長も歴任されており，正に生物学のマスターズレクチャーとして発酵工学の始まりから生物学へと変遷してきた流れを明快にご講演頂きました。中西一弘先生（中部大学）には，たとえば「省資源的な研究テーマ」でも可能な手段を探し，コストパフォーマンスを最大限に引き出す実験の考案の過程で，重要な発見が得られるとのお話を頂き，着眼点の重要性を伝えていただきました。今中忠行先生（立命館大学）は「研究における守・破・離」と題した熱気溢れるご講演で聴衆を魅了されました。守・破・離とは武道・茶道における師弟関係と道を究めるための流儀ですが，これは研究を究める道も同じであると，わかりやすくご紹介いただきました。園元謙二先生（九州大学）には，「生物学の未来」と題し，各年代の研究者が取り組むべき課題と姿勢，ご自身の研究経歴から現在のバクテリオシン研究に至るまで，明快にご講演頂きました。熱気あふれる4名のシンポジストの先生方のご講演は，生物学を志す学生・若手研究者の研究意欲を大きく向上させたことは間違いありません。

興奮冷めやらぬまま，引き続き，4会場に分かれ33件の一般講演会へと移行して活発な討論が展開されました。初めて学会発表をする緊張した大学院生から，ベテラン教員が自らの発表する演題も織り交ぜられ，特に大学院生にとってはよい機会になったかと思えます。

その後，リーセントカルチャーホテルに移動して約80名の関係者が集まり，記念祝賀会が盛大に行われました。運営にご協力を頂いた学生さんも出席し，酒造メーカー各社様からご提供いただいたお酒を賞味しながら，親睦を深めました。程よい人数でもあったため，若手教員や大学院生が大教授とお話をさせていただき姿も散見され，生物学の未来への発展を加速する力となる会になったかと思われます。

（西日本支部・庶務幹事・二見淳一郎）



シンポジウム会場の様子



祝賀会にて